

転スラ??このすば カ
ズマ覚醒

たまごかけ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カズマさんが地球で死んで、向かう先は転スラ世界。

目次

転スラ??このすば カズマ覚醒 | 1

転スラ??このすば カズマ覚醒

(これでも、まだだ、全然足りない。俺には才能がないから。生まれ持った特別な血筋だとか、すげー頭がいいだとか、何もないんだ。ただじゃんけんが強いらいのそんな俺が、ようやく本気で守りたいって思えるものを見つけたんだ!だから、だから!!)

「俺にありつたけの力を!!!」

血だらけになった凡人の咆哮は、かくして世界へと響く。

この世界において、強さとはすなはち心だ。どれだけ頑強な肉体を持つ者であれば、その心が脆弱であれば決して絶対者へとは至れない。

カズマは、自分が思う通りに、弱い。

スキルの数こそ多いものの、それは彼の多面性を表すものでしかなく、かろうじてユニークスキルに至っているだけのものばかり。

鍛えたところで、小手先の技術は伸びていくものの確固たる力としての成長は微々たるもの。聖人はおろか、仙人になることを夢見るのも烏滸がましい肉体的なスペックだ。

それでも、

今その胸に抱く思いは本物だ。窮地にこそ人の本質は現れる。

いつも心の奥にしまい込んでいた本性は、決してこの絶望的な状況においても、泣き喚き、逃げることを選ばなかった。

考えれば当然なのかもしれない。彼にできることは多くあれど、彼にしかできないことなどそうそうないような、言ってしまえばただの少年に、多くの者が信頼を寄せ、誇り高き悪魔達でさえある一定の敬意を評した。あの、魂を直接見ることの出来る悪魔でさえだ。

世界は知る。

凡人の底力を。

どこに出しても恥ずかしくない『最弱』は、『最弱』なままに、『最強』へと迫る。そうして、世界の声が静かに告げ出した。

告一

個体名「カズマ・サトウ」の希求に応えて、ユニークスキル『幸運者』運のいい者が進化。
究極能力アルティメットスキル『幸運之王』エリクスを獲得。

成功しました。

続きまして、ユニークスキル『器用者』そつなくこなす者、『自信者』自信ある者、『小心者』こずるい者を廃統合して進化。
アルティメットスキル『芸達之王』アークを獲得。

成功しました。

続きまして、数あるエクストラスキルを統合し、ユニークスキルを作成。ユニークス
キル『収集家』数は力、『野心家』ささやかな願い、『予測士』見通す者を獲得。

更に、『予測士』見通す者を主軸として新たなスキルを作成。究極能力『先見之王』パニールを獲得。
成功しました。

警告一

魂と肉体のレベルが不釣り合いです。魂が肉体の許容度を上回っています。
個体名「カズマ・サトウ」の進化を推奨します。

了ー

個体名「カズマ・サトウ」の進化を開始します。

…… 『仙人』への進化に不完全ながら成功。

続いて、『聖人』への進化へ移行します。

…… 失敗しました。経験値とレベルが足りていません。

代案として、獲得した究極^{アルティメットスキル}能力を総統合し、最適化を本人に提案します。

ー

静かに、されど一瞬の間に行われていく自分の進化をまるで他人事のように聞いていたカズマは、突然の提案に激しく首を縦に振ることで同意した。

ー

当人より、スキルの総合による最適化の了承を得ました。

これより、究極能力アルティメットスキル、『幸運之王』エリス、『芸達之王』アックア、『先見之王』パニルの総統合を開始します。

.....

.....

.....

総統合により、究極能力アルティメットスキル『祝福之世界』この素晴らしい世界に祝福をを獲得。成功しました。

以上を持って、個体名「カズマ・サトウ」の進化を終了します。

1

マ。世界の声が遠くなっていくのと同時に、ぼんやりとしていた意識も覚醒していくカズマ。

相変わらず死にかけな状態にも関わらず、自分の中に力が満ちるのを感じていた。今の自分は、どうしたというのだろうか。

たとえ相手がなんであれ、まるで負ける気がしない。

ああ、背後には、善戦虚しく負けてしまった、立場上部下な俺より強い奴らが転がってこつちを見ている。

前方には、そんな俺の部下と、ついさっきまでの俺を吹き飛ばしてくれやがった敵がいる。

「カズマ様！お逃げ下さい！貴方ならばまだ逃げられるやもしれません！ここは我等に
!!」

そういつて震える足を無理矢理立たせて、勇敢に俺の前に立とうとする部下達。

…… まったく、いつもいつもふざけてばっかだつてのに、こんな時だけカッコいいのはずい。

軽口叩き合つて、肩組んで笑つてんだろ？いつも。

「バカなの、お前ら。こんな死にかけの奴らが束になつても、俺が逃げる時間なんて稼げるわけねーだろう。」

「は、ハアあああ!!?!?!決死の覚悟を決めて立ち上がった部下にそんなこと言いますか!!?!」
「そうだそうだ!!?!」

戦場だつてのにいつもみたく騒ぎ出すバカども。

「そうだよ。お前らはかしくまってるよりそうしてた方がいい。」

「いいから、そこでお前らは寝とけ。いつもみたくお前らは俺に、『お願いしますカズマ様ー!』っていつときやいいんだよ! 変に覚悟決めてんじやねえぞコラ!!」

俺の言葉に、ポカン顔のブツサイクになる部下達。

俺が何を言ったのか一瞬わからなかったようだが、ようやく理解が追いついたのか、表情からさつきまでの険しさが消えた。

「……………いいんですか? 任せちゃって、頼っちゃても。」

「いちいち聞いてくんない。言っとくが、今回だけだからな!! こんな危ないのは!!!」

「素直じゃねーんだからまったく……………じゃあ、俺らじゃどうしようもないんで、

『お願いします、カズマ様あーーー!!!』

素直じゃないのはどっちだつづの。

でもまあ、そんなふうには部下に頼られちゃ、できる上司としてはやらざるを得ないよな。

そもそも、ここ突破されたらリムルに大目玉食らうし。

だから、まあ……………

やるしかないか！

「しょうがねえな—————」
「!!!!!!」